

# 海岸線からの距離及び標高による 津波波力の低減に関する研究

建築生産研究グループ 主任研究員 岩田 善裕

## I はじめに

東日本大震災における津波による建築物の被害調査等を踏まえ、平成23年国土交通省告示第1318号（津波浸水想定を設定する際に想定した津波に対して安全な構造方法等を定める件）が制定された。当該告示では、建築物に作用する津波波力の算定法が規定されており、その根幹をなす津波波圧の算定式には、浸水深の水深係数倍に相当する静水圧の式が採用されている。しかし、この水深係数の値は、津波を軽減する効果が見込まれる防潮堤等の遮蔽物がない地域では、津波避難ビル等の建設地点の海岸線からの距離や標高といった陸地の特性によらず一律3という厳しい値が設定されており（図1）、設計荷重が過大となり設計が困難となるケースもあることから、水深係数のより合理的な設定法が求められているのが現状である。

本研究では、陸地の特性として津波避難ビル等の建設地点の海岸線からの距離及び標高に着目し、勾配を有する陸地を遡上する津波の数値流体解析により、海岸線からの距離及び標高に応じた津波の流速、浸水深、フルード数の変化について調査し、水深係数のより合理的な設定法の提案については津波波力の低減に資する知見を得ることを目的とする。

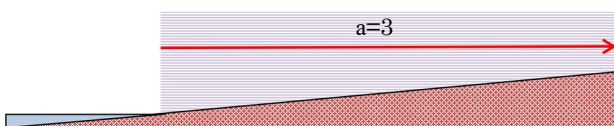


図1 水深係数  $a$  の設定の現状

（津波を軽減する効果が見込まれる防潮堤等の遮蔽物がない地域では、一律3と設定される。なお、上記条件を満たす防潮堤等の遮蔽物がある地域では、海岸線から500m以上離れている場合は1.5、それ以外は2と設定される。）

## II 研究概要

(1) 津波の数値流体シミュレーションの実施

津波の数値流体シミュレーションを実施し、勾配を有する陸地および勾配なしの陸地を遡上する津波のフルード数、水深係数指標等に関するデータを取得し、海岸線からの距離に応じた津波波力の低減に関するデータ整理を行った。

津波の非先端部を対象とした解析では、陸地への遡上に伴い水深係数が低下し、陸地勾配が大きいほど低下度合いが大きくなる傾向があることがわかった（図2）。また、現行告示で規定される水深係数3又は2が規定の下限値1.5以下となるのに必要な遡上距離は、数百m程度であるとの知見を得た（表1）。一方、先端部が卓越する津波の解析では、水深係数の値のばらつきが大きく、陸地への遡上に伴う低下傾向もほとんど見られなかった。

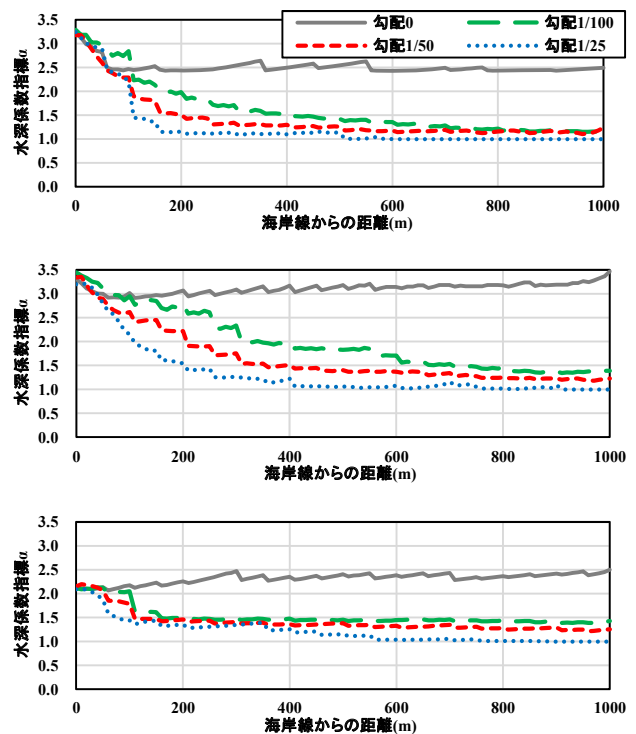


図2 海岸線からの距離と水深係数の関係  
（津波の非先端部を対象とした解析）

表1 水深係数3 又は2 が1.5 以下となるのに必要な  
遡上距離

	陸地勾配	遡上距離 (m)
津波 a ( $\alpha=3$ 程度)	0	—
	1/100	400
	1/50	200
津波 b ( $\alpha=3$ 程度)	0	—
	1/100	700
	1/50	400
津波 c ( $\alpha=2$ 程度)	0	—
	1/100	150
	1/50	100
	1/25	70

(2) 津波波力の低減に関する評価法の検討

解析結果を踏まえ、津波の非先端部が卓越する場合を対象とし、海岸線からの距離及び標高に応じた津波波力の低減のための評価法の検討を行った。一般的な直方体形状の建築物に作用する津波波力は、水深係数に基づいて定義され(式(1))、水深係数はフルード数に基づいて定義される(式(2))。本検討では、エネルギー保存則、流量保存則等に基づき、海岸線からの距離及び標高に応じたフルード数の評価式を提案した(式(3))。最後に、評価式の推定精度を検証し、提案する評価式が概ね良好な推定精度を有していることを確認した(図3)。

<津波波力算定式>

$$F = \frac{1}{2} \alpha^2 \rho B g h^2 \quad (1)$$

$F$ : 津波波力、 $\alpha$ : 水深係数指標、 $\rho$ : 水の単位体積質量、 $B$ : 建築物の幅、 $h$ : 浸水深

<水深係数とフルード数の関係>

$$\alpha = 1 + \frac{Fr^2}{2} \quad (2)$$

<提案式> (海岸線からの距離及び標高に応じたフルード数の評価式)

$$z + L \frac{n^2 g}{2h_0^{1/3}} \left( Fr_0^2 + \frac{Fr^{20/9}}{Fr_0^{2/9}} \right) = h_0 \left[ 1 + \frac{1}{2} Fr_0^2 - \left( 1 + \frac{1}{2} Fr_0^2 \right) \left( \frac{Fr_0^2}{Fr} \right)^{2/3} \right] \quad (3)$$

$L$  及び  $z$ : 対象地点の海岸線からの距離及び標高、 $n$ : マニングの粗度係数、 $Fr_0$  及び  $h_0$ : 海岸線における津波のフルード数及び浸水深、 $Fr$ : 対象地点における津波のフルード数 (フルード数1 以上を適用範囲とする。)

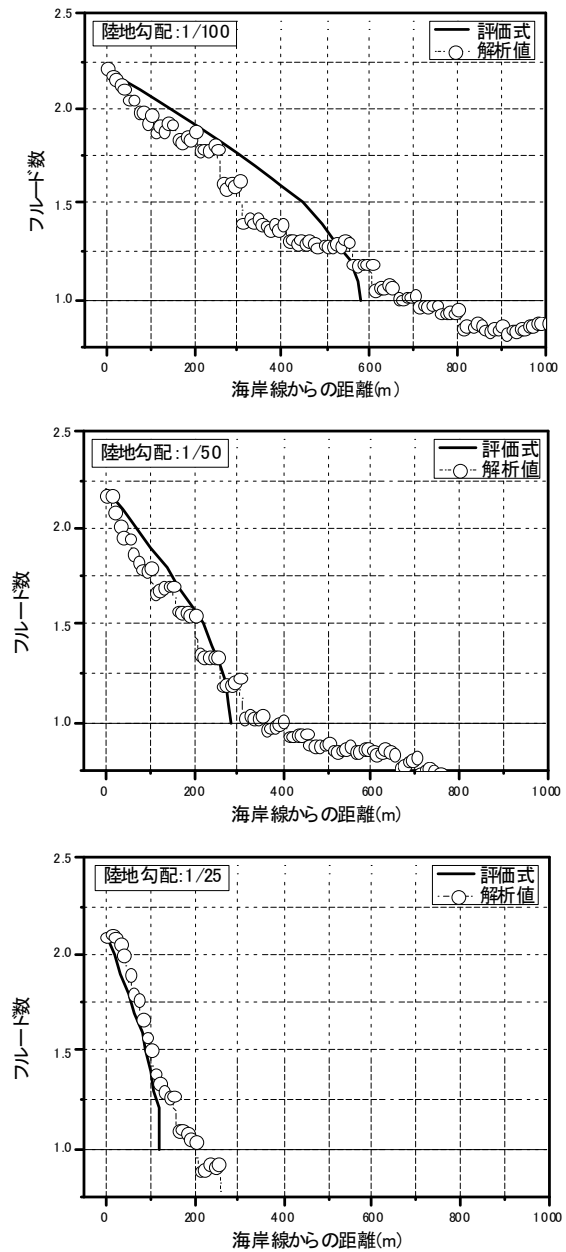


図3 評価式の検証例 (津波 b)

III まとめ

本研究では、海岸線からの距離及び標高に着目した勾配を有する陸地を遡上する津波の数値流体解析を実施し、津波の非先端部が卓越する場合を対象として、海岸線からの距離と水深係数の関係、水深係数が3 又は2 程度から1.5 以下となるのに必要な遡上距離を明らかにするとともに、津波波力の低減に関する評価法を提示し、提案する評価式が概ね有効な推定精度を有していることを確認した。